

化にはたした過程について記述している。

第五章明治時代では、日本人の目を引いた、治療椅子での施術、手用切削具や足踏エンンによる歯の切削、齶歯の充填法、蒸和ゴム製の義歯、笑気ガスによる無痛抜歯など、西欧歯科技術が日本に導入される歴史の記述がある。

わが国では医師の養成は国策として進められたのに対し、歯科では公的の養成機関すらなかつた。そのため、歯科医になるためには歯科医の所で書生をしたり、私塾で学んだりしていた。正規の歯科医の養成機関は、明治二二年に設立の高山歯科医学院が同四十年東京歯科医学専門学校に、同年設立の共立歯科医学院は、同四二年、日本歯科医学専門学校になり、この二校によつてははじめられた。

当時の両校の治療風景が、米国の学校の写真とともに載っている。

第六章の項は、大正元年の専門学校指定第一回生の卒業から始まり、翌年から女子の歯科医学校やその他数々の歯科医学専門学校が設立された。

昭和になって、同三年の官制の歯科医学校である高等歯科医学校設立をめぐる経過と校名の由来の話は興味深い。

「歯科医療行為は、内科系などの医療とは異なり、知識はもちろんであるが技術の占める割合が大きいので、そこで用いられる手段や歯科材料の変化によって大きな影響を受ける」と歯科医療行為の特殊性をとりあげ、歯科用器材、器具の变迁とそれにもなう歯科の技術の關係が記されている。

また、ムシ歯予防デーに始まる口腔衛生の普及運動や学校歯科についても記述されている。

第七章の昭和後期では、医療制度の変遷、社会問題となった差額徴収、老人医療問題など、最近の話題もとりあげている。

フッ素物導入をめぐる記述は、筆者の独壇場であり貴重で、読みごたえがある。

本書は、単なる歯科の医療史としてばかりでなく、歯科医療の将来を示唆するものであると思われる。

(新藤 恵久)

〔医歯薬出版、東京都文京区本駒込一―七―十、電話〇三一五三九五―七六〇〇、平成十四年一月、B五判、二〇〇頁、六〇〇〇円〕

八木剛平・田辺 英 著

『日本精神病治療史』

医学史研究のなかでも精神医学史、とりわけ日本の精神医学史研究については研究者の層も薄く、まだまだ未開拓の分野が少なくない。しかし、一九九七年に「日本精神医学史学会」が発足したことも一つの契機となり、日本の精神医学史についても意欲的な研究が次々と発表されるようになった。

二〇〇二年は豊作の年で、四月に八木・田辺氏による『日本

精神病治療史」、九月に岡田靖雄氏による『日本精神科医療史』という二冊の通史が出版された。

「まえがき」で、八本書の関心のひとつは精神病患者の処遇と医療の「現場」にあり、そのため昔の現場の雰囲気を感じられるような逸話や挿話に多くの頁をさいた、いまひとつは日本の精神医療を特徴づける治療思想は何かということだ。著者は記している。本書は、こうした意図が十二分に伝わる活きいきとした叙述になっており、読み物としても一氣に読ませる面白さがある。

第一部の「古代から江戸時代まで」では、岩倉大雲寺・順因寺・浄見寺などでの宗教的治療や民間療法について、第二部の「明治時代から昭和二〇年代まで」でも神社や寺院での民間療法や私宅監置、保養所や収容所での患者の処遇に多くの頁がさかれている。精神医療の歴史では、社寺や民間療法がはたした役割が重要で、そこから当時の人びとの精神病患者への眼差しや態度が見えてくる。著者らは、医学史研究の中では忘れられがちなこの分野に光をあてることで、「昔の現場の雰囲気」を立体的に浮かびあがらせることに成功している。第一部、第二部は他の研究者による著書や論文からの引用が多いが、第一次史料に基づく独自の知見や見解も述べられており興味ぶかい。

評者としては、第三部の「昭和二〇年代以後」を一番面白く読み、教えられることが多かった。第三部は、「終戦直後の患者たち」「私宅監置からの開放」「病院医療の発展」「民間精

神病院に対する批判と告発」「精神医療の脱入院化」の各章からなる。通常、「歴史書」では歴史の評価が定まらない「現在の事柄は避けて書くことが多いが、本書では「二〇世紀末の動向」を「ゆるやかな脱入院化の始まり」と位置づけ二〇〇〇年まで記述している。第三部がもつとも活きいきと描かれ臨場感に満ちているのは、著者（八木）自身が体験した「生きた歴史」がふんだんに書き込まれているためだと思う。ライブの「語り」のような同時代的な記述から、八木自身の精神医療への情熱と治療哲学の息吹が伝わってくる。

精神医療にとつても、昭和は激動の時代だった。戦前を知る生き証人は少なくなつたが、昭和の生き証人による歴史記述を今のうち残しておくことは重要なことだ。本書に刺激され、精神医療の生きられた昭和史が、さらに多くの人により書かれることを期待したい。

「終章」では、八木が提唱する自然治癒力を重視した「ネオヒポクラティズム論」が説かれ、過去から現在、さらに未来へと続くひとつの物語が終わっている。

精神科医が精神医療の歴史を書くことは、長いあいだ「最後の道楽」と見なされてきた。これは医学史にたいする多くの医師の平均的な見方でもあるだろう。しかし本書は、過去を知ることが現在の、さらには未来の精神医療の役割やあるべき姿を深く考える一つの基盤であり、それこそが歴史家でもない精神科医が精神医療の歴史を物語ることの意味だということを明快に教えてくれる。

本書はバランスのとれた上質な通史に仕上がっている。あえて注文をいえば、「日本の精神医療を特徴づける治療思想」が本書の関心のひとつだとすれば、(一)諸外国と比較しての日本の治療思想の特徴と、(二)精神医学界内だけの思想の流れではなく、他の医学分野や社会文化的な時代背景と精神科治療思想との関連について、もう少し詳しい論及があってもよかつたと思う。個人的には、第三部をさらに発展させた「精神医療の戦後史」が著者によって上梓される日を待ちこがれている。

(昼田 源四郎)

〔金原出版、東京都文京区湯島二―三―一四、電話〇三―三八―一七―一八四、二〇〇二年四月二〇日、A五判、二二四頁、定価四五〇〇円〕

松本 明知 著

『華岡青洲の新研究』

華岡青洲の研究における本邦の第一人者である松本明知氏がこのたび岩波出版サービスセンターから『華岡青洲の新研究』を限定出版された。華岡青洲は日本の外科学の祖であり、また同時に麻醉科学の祖でもある。著者は弘前大学医学部麻醉科学教室の教授をながらく務めておられ、華岡青洲を論じるのに最もふさわしい医史学者である。さらに、三十五年に

および華岡青洲の研究に携わってこられ、青洲が全身麻酔下乳癌摘出術を行ったのは定説よりも一年前の文化元年(一八〇四年)であったことを明らかにしたのも著者である。この仕事の以降も精力的に華岡青洲の研究をなされ、日本医史学雑誌を中心にその論考を発表されてきた。今般上梓された『華岡青洲の新研究』は、著者の最近の仕事の集大成でもある。

著者が華岡青洲の研究発表をするまでは呉 秀三、宗田 一の二氏が研究の中心を担っていた。特に呉 秀三氏の研究は、一九二三年の大著『華岡青洲先生及其外科』に集大成されており、青洲に関する臨床、学統、系譜などあらゆる面に及んでいる。発表以来、約八十年が経過した現在も、青洲研究者が座右におくべき最も価値の高い書物であることに変わらない。

著者は、呉 秀三氏がその著書の中で華岡青洲自筆とした唯一の書物である『乳巖治験録』が、青洲自筆の記録でないことを明解に論証し、呉の誤謬を指摘している。呉の著書の誤りや多くの未解決の問題を指摘したのも著者が最初の研究者である。この論考を読めば、誰しも著者の意見に賛同するものと思われる。

さらに、著者のフィールドワークのすばらしさには感嘆する。乳巖姓名録に記載された一五五名の患者のうち、三十三名の没年月日を实地調査で特定している。この事も、呉氏以後の医史学者が誰しも成し得なかつた偉大な業績である。こ